
共同研究の概要

関沢まゆみ

基盤研究「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究—『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に—」の成果報告書がここに刊行されるに際して、その立ち上げの際の目的、そして研究経過について紹介しておく。

1. 目的

1997年度・98年度に本館が行なった博物館資料調査「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から、10年以上が経過した現在、その後の日本各地の葬送墓制の習俗はまたさらに大きく変化している。とくに、2000年を境に、農村部においても葬祭場の建設が相次ぎ、葬儀の場所が自宅から葬祭場へと移り、それにともなって葬送儀礼の省略化や死穢忌避観念の稀薄化などが指摘されるようになってきている。

本共同研究では、第一に、この博物館資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』1～4（1999年・2000年刊行）をもとに、その追跡調査を行ない、葬送・墓制の変化の実態を調査分析することを目的とする。これには、A：各地の地域ごとの葬送・墓制の変化の実態を調査分析する方法、B：テーマごとに広く日本各地での変化を比較の視点で調査分析する方法（例：洗骨・改葬習俗の変化、近畿地方村落のサンマイ利用の変化、土葬から火葬へ、自宅葬から葬祭場利用のホール葬へ、など変化の過渡期の情報蒐集など）、の2つを考えている。そして、第二に、各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布についての情報整理を行ない、日本列島の民俗の地域差の問題を葬送・墓制の側面から考察する。たとえば、お盆の墓参習俗の近畿地方と東北地方や九州地方など各地で見出される地域差、四国地方の巳正月の習俗と東北地方のみたまの飯の習俗などの比較、盆に迎える靈魂と盆棚の設置の仕方の上での東西南北に長い日本各地の地域差、葬送の役割分担における血縁的関係者と地縁的關係者などその分担の上での地域差などを想定している。第三に、1960年代から70年代の高度経済成長期における生活変化と2000年以降におきている生活変化、とくに葬送墓制の大きな変化と、両者二つの時期の時差・タイムラグに注目することによって、民俗の伝承の変化と世代交代という問題などについての分析を試みる。本共同研究は、本館の資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』1～4に得られている情報資料をもとにそれを活用して、民俗学の基本的研究課題である地域差と時間差という両者を視野に入れた研究展開を試みるものであった。

2. 研究経過

○平成22年(2010)度研究会

第1回研究会 日時：2010年5月8日(土) 場所：本館

共同研究員各位の研究紹介、代表者による本共同研究の主旨説明が行なわれた。研究の目的においては、①『死・葬送・墓制資料集成』をもとに、その追跡調査の実施(各地の葬送・墓制の変化の実態を調査し分析する、1960年代と1990年代の事例調査に加えて現在の2010年前後の実態調査を行なう)。②テーマごとに一定範囲で調査と分析を試みる(南西諸島における洗骨・改葬習俗の変化、近畿地方のサンマイの利用の変化、土葬から火葬へ、自宅葬から葬祭場葬へなど過渡期のケースの情報蓄積など)。③列島の範囲での民俗の地域差への視点を取り入れる。④高度経済成長期の変化への注目、の4点について提案がなされ、各位の意見交換が行なわれた。

第2回研究会 日時：2010年11月13日(土) 場所：本館

関沢まゆみ「火葬の普及とサンマイ利用の変化—滋賀県下の事例より—」

鈴木岩弓「東北地方の骨葬習俗」

倉石あつ子「高度経済成長期以降の葬儀の縮小化—家族・介護・看取り・葬送儀礼—」

西村 明「習俗の伝承か、さらなる変化のプロセスか」

第3回研究会 日時：2010年12月4日(土)・5日(日) 場所：本館

松田香代子(愛知大学・非常勤講師)「静岡県裾野市における葬儀の現状」

菊池健策「葬式の昔と今—福島県東白川郡矢祭町の事例—」

大本敬久「四国における巳正月行事」

武井基晃「移動をとまなう祖先祭祀と自動車の普及—沖縄のシーミーとウマチーを中心に—」

主な論点は以下の通りである。まず、福島県、長野県、静岡県などの追跡調査の報告では、死亡から通夜、葬儀(告別式)、火葬、納骨までの順番が多様で混乱していることがあらためて確認された。なかでも公営火葬場の利用による新たな火葬の普及によって現れた、葬儀より前に遺体を火葬にしまう「骨葬」が注目された。論点の一つは、骨葬について現在までにどのような地域差が生じてきているのか、という点であった。もともと伝統的には土葬であってそこに新たに火葬が入ってきた地域の場合と、もともと野焼きなど伝統的な火葬が行なわれていたところに、新たな設備で簡単に火葬ができる公営の火葬場施設が作られた場合と、その両者における火葬骨に対する意識、受け入れ方の違いがみられるのではないかという問題であった。また二つ目は、この簡便な遺体処理の普及と従来の死霊に対する畏怖の観念の変化との関係についてであった。この問題は、近年、葬儀の場での霊魂話があまり語られなくなっていることとも関連し、また逆に「トイレの花子さん」などの現代的な怪談のたくいが流行ってくるプロセスや、楳図かずおのホラー漫画や水木しげるの妖怪漫画などのブームの起こりとその変遷とが、葬儀の変遷と関係しているのではないかというその可能性についての視点が提示された。葬儀の場における死体と霊魂とに向かい合うリアリティの希薄化が、逆に日常の場における霊魂感覚や妖怪変化への空想の肥大化へ転換しているのではないか、そしてその空想の商品化が現代世相の中に読み取れるのではないかという指摘であった。また、共同研究員自身の問題として、都市移住と墓の設営の問題、高度経済成長期における習

俗の変化の追跡と研究の上での世代責任、などについても意見交換が行なわれた。そして、共同研究員および研究協力者の間で本研究会の情報を共有し、今後の研究活動への参考とするために、第2回研究会2010年11月13日(土)と第3回研究会12月4日(土)・5日(日)の発表要旨と質疑応答とをまとめて編集のうえ、簡易製本を行なった(95ページ)。

○平成23年(2011)度研究会

第1回研究会 日時：平成23年6月4日(土) 場所：東京ガーデンパレス

大本敬久「正月と死者祭祀—民俗と歴史—」

新谷尚紀「火葬と葬儀の変化—広島県旧千代田町域の事例より—」

第2回研究会 日時：平成23年11月12日(土) 場所：東京ガーデンパレス

関沢まゆみ「盆棚の地域差について」

武井基晃「沖縄の葬送—中城村での調査を事例に—」

高橋史弥(國學院大學大学院生)「北海道における葬送習俗の変容—全国的な資料集積の情報と帯広市域の情報との比較の視点より—」

第3回研究会 日時：平成23年12月17日(土) 場所：跡見学園女子大学

蒲池勢至(同朋大学仏教文化研究所・客員所員)「愛知県における葬儀の今昔」

倉石あつ子「縮小化する葬儀2—長野市の事例—」

鈴木岩弓「東日本大震災後の土葬復活にみる死者観の変化」

第4回研究会 日時：平成24年3月3日(土) 場所：本館

赤嶺政信(琉球大学法文学部・教授)「沖縄の墓制の地域的特徴と変化に関するいくつかの論点」

井口 学(沖縄民俗学会会員)「日本復帰前の沖縄における墓の新築をめぐる—新聞記事、公文書を中心に—」

越智郁乃(広島大学大学院総合科学研究科・特別研究員)「現代沖縄の墓制の変化—本島都市部の墓造りを事例に—」

主な論点は以下の通りである。まず、葬送儀礼の簡略化のなかで固い伝承を維持しているものへの注目である。葬儀社の関与と葬儀の場の変化(自宅から葬祭場の利用へ)によって、葬送儀礼の省略化が進んだことはこれまでも指摘されてきたことであつたが、愛知県の報告者(年間40件の葬儀を行なっている僧侶)からも葬送儀礼の消滅と葬儀の世俗化の実態について報告がなされた。愛知県春日井市の事例では、昭和30年代までは自宅葬、昭和40年代から60年代までも自宅葬ではあつたが新たに葬儀社の関与がみられるようになった時代、そして平成以降は葬儀会館での葬儀が中心となつた。そのなかで儀礼の対象が死者を安置した棺から遺影が置かれた祭壇に変化していったこと、生花(洋花)の大量使用と櫛の形骸化、霊柩車の普及と葬列の消滅、葬儀の手伝いは男性が中心と決まっていたのが葬儀会館では女性の司会者が登場するなど、僧侶としての葬儀執行者の立場から大きな変化として指摘された。このような春日井市域の変化のなかでも、湯灌が継承されていることが注目された。これについては、北海道帯広市の事例(1940年代から2010年代の37事例の調査)でも葬祭場の利用によって葬儀は大きく変化していつているにも関わらず、湯灌

は家族や親戚の仕事とされていることが報告された。また、広島県中山間地、旧千代田町域の公営火葬場の設置（1970年、2008年改築）、葬祭ホールの開設（2008年）と、それにもなう町内の3つの集落における葬儀の変化についての調査報告が行なわれ、葬祭ホールの利用に伴い、伝統的であった真宗門徒の講中の協力が希薄になるなか、その講中によるオトキ（お斎）が継続されているケースが1つだけあることが注目された。葬儀の場所の変化が葬送儀礼の省略化あるいは消滅をもたらしているが、そのようななかで、湯灌は家族・親戚で、葬儀後の飲食は講中の協力で、など古い伝承を維持している事例もある。変化の早い地区と遅い地区との双方について今後の動向に注意する必要がある。

また、民俗の分布をめぐる問題では、四国地方の巳正月、中国地方や近畿地方にみられる仏の正月に関連する民俗の分布とその歴史の追跡への試み、盆棚の地域差をめぐる問題の提起など、日本列島全体を俯瞰して民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みが紹介された。柳田國男が提唱したいわゆる比較研究法の活用については、民俗学の戦後史に起因する現状としてまだその方法が十分には磨かれておらず未熟な段階にあるため、さらに地域差の解釈の仕方について議論していく必要があることが確認された。

○平成24年（2012）度研究会

第1回研究会 日時：平成24年6月9日（土） 場所：跡見学園女子大学

小田嶋恭二（北上市教育委員会文化財課）「北上市和賀町内における葬送儀礼について」

西村 明 「葬送儀礼への第三者の関与」

新谷尚紀 「民俗調査にとって40年の変化とは—志摩地方の葬送墓制（1972年・2012年）：民俗学研究と世代責任—」

第2回研究会 日時：平成24年9月15日（土） 場所：東京ガーデンパレス

田井静明（瀬戸内海歴史民俗資料館）「香川県西部地域の葬送墓制習俗の変化」

梅野光興（高知県立歴史民俗資料館）「高知県日高村本郷の葬儀とその変化」

関沢まゆみ「盆行事の地域差—但馬沿岸地方の盆棚—」

小田嶋建己（東北大学大学院専門研究員）「山形県における「両墓制」の現在」

第3回研究会 日時：平成24年11月10日（土） 場所：東京ガーデンパレス

鈴木通大（実践女子大学非常勤講師）「神奈川県における葬送墓制の習俗の変化について—大和市域を中心に—」

金田久璋（学識経験者）「十三年後の今起きていること—福井県三方郡美浜町菅浜の葬送墓制の変化—」

福澤昭司（松本市立田川小学校校長）「松本市における最近の葬儀の変化について」

第4回研究会 日時：平成24年12月21日（金） 場所：東京ガーデンパレス

『研究報告』（特集号）編集打ち合わせ

主な論点は以下の通りである。葬儀社の関与と葬儀の場の変化（自宅から葬祭場の利用へ）によって、葬送儀礼の省略化が進んだことはこれまでも指摘されてきたことであったが、岩手県北上市、三重県志摩地方、香川県、高知県、神奈川県大和市、福井県、長野県松本市、の各報告者からも葬

送儀礼の簡略化や消滅の実態と墓制の変化について具体的な報告がなされた。なかでも比較的近年まで土葬が行なわれてきた地域における火葬への変化とそれに伴う葬送墓制の習俗の変化が注目された。

たとえばその一部を記せば以下のとおりである。香川県旧詫間町（現三豊市詫間）では昭和55年（1980）に年金積立金還元融資によって香田火葬場が建設され、また、平成11年（1999）に葬祭場が建設されるとその頃から郡部にも急速に葬祭場を利用するケースが増加していった。このような葬儀の変化が確認された一方、ヤママイリ（イヤダニマイリ）と呼ばれる伝統的な魂送りの習俗は「濃厚に実施」されていることが注目された。詫間町は両墓制の地域であり、遺骸の埋葬地点には海の自然石を置いて目印にし、石塔墓地は檀家寺に設けられていたが、埋葬墓地においても昭和50～60年代（1975～1989）にハカジルシと呼ばれる小型の石塔（俗名を記す）建立が一気に広まった。火葬になった当初は土葬のころと同じくイガキをめぐらすなど墓上装置がみられたものの、火葬に慣れてきた現在では墓上装置はみられない。

高知県日高村本郷では近年まで土葬が行なわれ、また自宅で葬儀が行なわれてきたが、平成21年（2009）以降火葬のケースが、また平成23年（2011）の葬儀では葬儀社の会館が利用された。土葬から火葬へ、自宅葬から葬儀社利用への葬儀の変化により、明らかにトーマ組（近隣）の手伝いが必要なくなり、葬送儀礼も省略されていく、墓地も山の上から自宅近くに移して納骨堂式の石塔を建立する、など大きな変化が指摘された。四十九日に一升餅を49個に切り分けて「山」（墓地）から帰ってきた人に包丁の先に刺して配られていたが、平成21年に火葬になってからは、サイコロのように切った餅をお返しに渡すようになり、包丁で刺すようなことはしなくなった。死者の霊との食い別れの儀礼は継承されているものの、わざわざ魔除けの刃物を用いるというその所作の意味は継承されていないことが注目された。また、福井県三方郡美浜町では、平成11年（1999）に敦賀市に葬祭場が開業すると、ほとんどの家が葬儀社で通夜と葬儀と告別式を行なうようになった（耳川上流の山峡にある集落以外ほとんどすべてが葬儀社に依存）。極端な変化がおこったその背景に、婚姻圏の拡大、家の改築に伴い広い座敷がなくなったこと、女性の発言力の増大によりダイドコロマカナイが敬遠されたことなどが指摘され、「お金次第で一切を代行してくれる葬儀社に一任する」ことになったとの指摘がなされた。

以上のように、比較的遅くまで土葬と自宅葬が行なわれていた各地でも、火葬と葬儀社での葬儀によって一気に葬儀の簡略化が進んだことが確認された。

このほか、昨年度に続き、但馬地方の盆行事を中心に盆棚の地域差をめぐる問題の提起など、日本列島全体を俯瞰して、民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みが紹介された。

3. 研究成果

今回、1997年度・98年度の「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から10年余りを経ての追跡調査の結果について、北海道・東北地方、関東・甲信越地方、中部・東海地方、近畿地方、中国・四国地方、九州地方、沖縄地方のそれぞれから、共同研究員および研究協力者による調査報告が積み重ねられ、情報の共有がはかられた。1997・98年の調査者へ広く追跡調査を打診したが、調査地の当時の話者の高齢化や死亡によりすでに協力が得られなくなっているケースや調査者自身

の高齢化や状況の変化によって調査遂行が困難なケースもあった。このことは民俗の追跡調査における10年の年月の長さを痛感させるものでもあった。そのような調査地については次世代の若い研究者がかかわってあらためて調査を行なうこととした。そして、各地の調査報告から具体的にいくつかの注目点が確認された。

第一に、これまでの葬送・墓制の変化に関する研究でも指摘されてきていることではあるが、土葬習俗の消滅から公営火葬場の利用へ、自宅葬から葬祭場の利用へ、という葬儀の場所の変化と葬送儀礼の省略化と消滅、そしてとくに抵抗感のないままの骨葬の一般化、また従来石塔を建てることのなかった地域での新たな石塔墓地の設営など、葬送習俗をめぐる大変化が起きていることを各地の眼前の具体的な事例情報からあらためて確認することができた。

第二に、このような葬送儀礼の省略化のなかでも固い伝承を維持しているものが存在することも注目された。それは、湯灌へのこだわり（北海道帯広市、愛知県春日井市の報告）や真宗門徒の葬儀への協力が希薄になるなかでその講中によるオトキ（お斎）の継続（広島県旧千代田町の報告）、寺送りや魂送りの習俗の継続（栃木県芳賀郡、秋田県山本郡などの報告）、などである。

第三に、「土葬から火葬へ」の変化の起こり方の地域ごとの差異への注目である。たとえば、以下の点などが注目された。

近年まで土葬が行なわれていた地域の例 1997・98年の調査では平成2年（1990）になっても土葬が行なわれていた地区が6事例（58事例のうち）あった。そのうち、高知県日高村本郷の追跡調査では平成21年（2009）に初めて火葬が行なわれ、それに伴い、山を登ったところに立地していた墓地から自宅のすぐ近くに石塔を建立し墓地の設営がなされたことがわかった。また、滋賀県甲賀郡の追跡調査では平成13年（2001）4月1日から郡内の全町村が一斉に甲賀斎苑（広域斎場で同年4月1日より始動）を利用することになり、それまで行なわれていた土葬を完全に廃止して、全戸が火葬へと変わった。前者は各家の判断で火葬が選択された例で他の地域においても広くみられるものであるが、後者は村としていっせいに土葬を禁止して火葬へと変化した例であり、その決定の仕方に地域差が見出され、その背景調査の必要性が浮上している。そして、この両事例ともまだ基本的には自宅での葬儀が行なわれており、葬送儀礼も野辺送りの習俗は省略されているもののその他の儀礼は比較的継続されている。土葬から火葬への変化と葬儀の場所の変化は必ずしも直接は連動しておらず、これらの事例は過渡期のケースと位置づけられる。

「骨葬」の2つの意味 土葬から火葬へという変化、公営火葬場の新設や改築のほか、家族形態の変化（高齢者夫婦や一人暮らし、跡取り世代がない）、新たな石塔建立への動き（納骨）、などが関連している。その変化のなかで、過渡期のケースでは、死亡から通夜、葬儀（告別式）、火葬、納骨までの順番が多様で混乱している現状が報告され（これについては静岡県裾野市、栃木県芳賀郡市貝町ほか）、やがて「火葬に慣れてくる」と葬送儀礼の省略化や消滅がおこってきているという動向が注目される。このような近年の変化とは別に、もう一つ古い時代、昭和30年代中ごろまでに土葬から火葬へ変化した地域の例において注目されるのは、葬儀より先に遺体を火葬してしまうことによって、葬式、野辺送り、墓地への埋葬、魂送りまで一連の葬送の儀礼を従来の土葬時代と同じく行なっている東北地方の秋田県や青森県の事例である。現在では葬儀より先に遺体を火葬にして、その焼骨で葬儀を行なういわゆる「骨葬」が各地の都市部を中心に行なわれるようになっ

てきているが、それらと秋田県や青森県などいわば「骨葬」の先進地域との違いは、先進地域では野辺送りと魂送りを含めた一連の葬送儀礼を維持するために骨葬が選択されたのに対し、近年の各地の都市部の例は公営火葬場の予約が優先されるという現実、霊魂の処遇よりもまずは遺骸の処理を最優先にするという考え方に合致する方法として広まっているものといえる。

第四に、民俗学がその主要な調査研究対象としてきた両墓制の変化、消滅への動きである。土葬から火葬へと変化した現在、遺骸を埋葬するサンマイ利用が大きく変わってきている。(1) サンマイに焼骨を埋葬し、寺院境内などにある石塔墓地はそのまま維持しているケース、(2) サンマイに石塔を建立して新たな霊園墓地として利用するケース、(3) 寺院境内などにあった石塔墓地を新たにカロート式の納骨可能なものに建立し直すケース、などがみられる。滋賀県竜王町の事例では、公営火葬場の建設による伝統的なサンマイへの土葬から新たな公営火葬場での火葬へという遺体処理の変化にともなって、村ごとに遺骨納骨のための新たな石塔墓地の造成が平成17年から19年に各集落で次々と行なわれた。この地域では、近世まで非常に強力であった死穢忌避観念が、近代以降徐々に希薄化してきたのだが、それがこの時点に至って一気に加速していることが注目された。

第五に、各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布をめぐる問題についてである。たとえば、四国地方の巳正月、日本各地における盆棚の設置をめぐる地域差の問題など、日本列島全体を見渡して、民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みがなされた。比較研究法の活用についてはその実践方法が未熟な段階にあるため、さらに地域差の解読の方法について積極的かつ生産的に議論し試行していく必要があることが確認された。

第六に、本研究に関連してこれまでに刊行された主な論文や資料集等には以下のようなものがある。

- (1) 『基幹研究「高度経済成長とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究」2010年度研究会記録』国立歴史民俗博物館（簡易製本）2011年，95ページ（2010年度に行なわれた研究発表の要旨と質疑応答を編集）
- (2) 『葬墓制関係写真資料集1』国立歴史民俗博物館（簡易製本）2012年，190ページ（昭和40年代から50年代にかけて近畿地方から始めて東西日本各地で収集された両墓制に関する伝承情報を整理し、写真データ（455点）に解題をつけて編集）
- (4) 関沢まゆみ「土葬から火葬へ—火葬の普及とサンマイ利用の変化：滋賀県下の事例より—」『民俗学論叢』26 2011年，pp.23-44
- (5) 大本敬久「正月と死者祭祀—民俗と歴史—」『民具マンスリー』10月号 2011年，pp.9-24
- (6) 倉石あつ子「葬儀の拡大化と縮小化—長野県松本市郊外の農家の『音信帳』から—」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』10 2012年，pp.67-88
- (7) 鈴木岩弓「東日本大震災時の土葬選択にみる死者観念」座小田豊・尾崎彰宏編『今を生きる—東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言—』1人間として 東北大学出版会 2012年，pp.103-121
- (8) 武井基晃「民俗の変容の中で続くものの意味—岩手県北上市の葬送の手伝いと儀礼—」『東北民俗』46 2012年，pp.45-52

-
- (9) 関沢まゆみ 「『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性—盆行事の地域差とその意味の解説への試み—」『国立歴史民俗博物館研究報告』178 2013年, pp.203-236

4. 共同研究員 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者, 所属は平成25年3月現在)

- 大本 敬久 愛媛県歴史文化博物館・専門学芸員
菊池 健策 文化庁文化財部伝統文化課・主任文化財調査官
倉石あつ子 跡見学園女子大学文学部・教授
新谷 尚紀 國學院大學大学院・教授
鈴木 岩弓 東北大学大学院・教授
武井 基晃 筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
西村 明 鹿児島大学法文学部・准教授
小池 淳一 本館・研究部・教授
常光 徹 本館・研究部・教授
○山田 慎也 本館・研究部・准教授
◎関沢まゆみ 本館・研究部・教授

(国立歴史民俗博物館研究部)